

■某月某日の記録

^^ 二十時三十五分 √√

バッテリーよし。

記録開始。

彼女の退勤時間は二十時三十六分。

今日も遅くまで残業をしていたようだ。

テストがもうすぐだからだろうか。

辺りはすっかり暗くなり、一人で歩く彼女の背中は少し頼りなく見える。

ああ、こんな街灯のない道を選んじゃダメじゃないですか。

暴漢に襲われでもしたらどうするんですか？

でも僕がいますから。先生をいつでも守れるように、毎日こうして帰宅を見守っています。

きっと先生がこのことを知ったら、「受験が近い大切な時期にまで、私を守ってくれてあり

がとう」ってすごく感謝してくれるに違いないけど、先生もご存知の通り、僕に受験の心配は不要なので明かすつもりはありません。

愛しい人を守りたい気持ちが、先生への愛が抑えられないだけですから。

足音が響いている。僕はなるべく距離を取つてその背中を追う。

彼女が向かう方向は、どうやら自宅のようですね。

家賃六万八千円のアパート。セキュリティはしっかりとしているので安心です。

ただ、管理人が玄関横の管理人室に常駐のが気に入らない。彼女と毎朝毎晩、挨拶をしていのを見かけるたびに胸の中に黒い感情が渦巻くのを感じます。

あなたの綺麗な瞳に薄汚いおっさんが映っているのだと思うだけで、嗚呼、苦しい。

あのおっさん、彼女を性的な目で見てはいないだろうか。

ここからはあまりよく見えないが、もしそうだとしたら何か対策を考えなければならない。
僕が守らないと。危険なものは排除しないと。

^^ 二十一時十三分 vv

あ、彼女が自宅から出てきた。今日撮影した彼女の動画を確認することに集中していたから、危うく気付かないところでした。

退勤時の姿よりラフな格好になつていて。普段着だ。

「可愛いなあ」

思わずつぶやく。スーツとは違つて、優しいあなたにぴったりの可憐な姿だ。

もう遅い時間なのに……近くのコンビニへ買い物にでもいくのだろうか。

心配だからついていこう。

その足はコンビニを通り過ぎて駅前に向かつている。

あ！ もしかして気に入りのお弁当屋さんへ行くのかな？

その弁当屋は駅前にある細い路地に入る、いかがわしい店が立ち並ぶ繁華街のほぼ入り口付近にある。

健全な駅前と、大人の店が並ぶ繁華街がちょうど切り替わる場所、と言つてもよい。彼女は平均して週に一度はそこに足を運んでいる。

駅前のお弁当屋さんがお気に入りって、可愛いですね、先生。でも、繁華街に足を運ぶ男たちに、じろじろ見られていることに気づいてないから危なつかしくて。

駅に近づくにつれて人が増えてくる。

先生の姿を捉えにくくなるけれど、身を隠すのは容易になる。

あれ？ 先生と僕の間、あそこにいるのは二年生を担当している数学教師の「モノサシ」だ。ひょろ長い体つき。間違いない。いつも長い定規を持っていて、それを振りかざして生徒を指名するからそう呼ばれている。

辛氣臭く卑屈な表情をしていて、僕もあまり関わりたくない男だ。

噂では若い女性教師にセクハラをしているとか。

先輩面し、現場の仕事を直々に教えてやると、二人きりでの残業を持ちかけたりもするらしい。勿論、生徒からも避けられていた。

目を凝らすと足元がふらついているように見える。酔っぱらってるのか？ 気を付けて見れば、着ているスーツはよれよれだし、どこかで大騒ぎしてきた後なのだろう。しかし、まだ二十一時だぞ？ 一体何時から飲んでたのやら。

モノサシはいつも結婚指輪をしているから既婚者だというのは周知の事実だ。はあ。あんなおっさんでも結婚できるんだから、世の中は何か変だと思う。

「…………」

その時、急に頭が冴えわたる。自然に、うんうんと頷いてしまった。

「ああ、あいつ結婚してるのか……」

思わず声が漏れた。

普段着の先生。気が大きくなっている酔っ払い。

未婚の先生と、既婚者。

ホテルやら風俗店やらが並ぶギラついた繁華街。

このシチュエーション、上手く使えないだろうか？

例えば、酔っぱらっているモノサシの介抱を先生にやつてもらつて、その現場を巧く押さえ
る、とか。

僕のことだ。「良い画」が撮れるだろう。この程度の明るさがあればスマホでも十分撮影可能だ。

人通りの多いこの場所。そう、人混みに身を隠すことは容易い。

「…………」

氣を付けてそっと近づく。

モノサシは千鳥足で、いつもの神經質そうな性格は見て取れなかつた。

その癖、気だけは大きくなつており、歩くたび何かに悪態をつきながら歩いている。

僕はタイミングを見計らつた。

繁華街の方向へ向かう先生と、繁華街から出ていくモノサシがすれ違う、その瞬間を。

—— いまだ！

僕は飛び出して、力を込めてモノサシを先生の方へと押す。

先生が倒れてケガをしないくらいの力加減で。

「きやっ！」

先生の可愛い悲鳴が聞こえた。上手く行つたか?
物陰に身を隠し、撮影の準備をする。

急げ!

先生は驚いた表情で自分にぶつかつた男を見た。

嗚呼、少し怯えているその表情もたまらない。

次の瞬間、相手の正体がわかつたのかその表情を崩した。

一方、モノサシは先生のことをはつきりと認識できていなかつた。

目の前の先生に首を傾げていたが、次の瞬間、吐きそうになつたのか、口元を手で押さえる。

先生を汚したらただじやすまない……。

なんとか嘔吐することは避けられたモノサシだが、今度は先生の体に抱き着いたじやないか。

「……っ」

怒りで頭が一瞬真っ白になつた。すぐに胸に手を当てて深く深呼吸をする。
落ち着け、自分の作戦には仕方のことなんだ。むしろチャンスだ。

「ごめんね、先生。そんな汚らしい人間に先生の綺麗な体を触らせちやつてごめんね」

僕は、ごめんね、ごめんね、と繰り返しながら準備していたスマホを動画撮影モードにする。そして急いで録画ボタンを押した。

さて、先生はどうする？

抱き着いてきたモノサシに一瞬驚いた先生だつたけど、奴を無理矢理引きはがすと、華奢な肩を差し出した。

モノサシの腕を回し、引きずるように歩き出す。

「ああ、先生は優しいなあ……」

さすが僕の先生です。

カメラ越しに二人の様子を観察し続ける。

どうやらその足はタクシー乗り場に向かっているようだ。

僕は急いで先回りし、繁華街の看板がハッキリ映る様な場所を背景にし、二人が肩を組んで歩いてくる様子を撮影する。

「そんな露骨に嫌な顔しちゃって……可愛いなあ先生は……」

モノサシは肩を貸してくれていい先生に隙を見てキスしようとしたり、髪に顔をうずめたり。たびたびちょっかいを出すので助かつた。

9 記念日

殺意がふつふつと沸くが、二人がイチャつていて見えてなくもない。

あとは編集ソフトに動画を読み込み、それらしく見える瞬間を切り出せばいい。

「ああ、先生がどういう反応をするか楽しみだなあ」

撮影終了ボタンを押す。

今日は記念日だ。

このまま卒業を迎えると思っていた。燻ぶっていた気持ちを押し殺したまま。

でも今日。僕と先生が運命のいたずらで引かれ合い、その存在が突然交わってしまった。

今までずっと胸の奥に秘め続けていたあなたへの愛をようやく伝えることができる。

どんな風に彼女と愛し合うか、

受験よりも何よりも難しく、そして大切な問題が僕にはあるのだ。

終わり